

本学蔵東海道関係浮世絵（三）

ー日本橋から品川宿ー

山下 琢巳

はじめに

日本橋を起点とした東海道は、日本橋通、中橋広小路、南伝馬町を経て、京橋に至る。この橋を渡ると、新両替町、尾張町と続き（現在の銀座中央通）、芝口橋（新橋）に至る。芝口、右奥に江戸湾を一望できる愛宕山に至る源助町、露月町、柴井町、宇田川町、神明町、右奥に徳川家の菩提寺増上寺の大門が見える浜松町を経て、金杉橋に至り、芝橋を渡ると、左に雑魚場と呼ばれた漁師町のある芝浜が開け、街道は海沿いに続く。しばらく進むと江戸市中への出入り口であった高輪の大木戸があり、街道右には、願生寺、泉岳寺、東禅寺などが続く。そして、さらに進むと島津、有馬などの藩邸があり、真右に小高い八つ山がある地点が品川宿の入口となる。入口近くは歩行新宿であり、道は海ばたを離れて町並に入る。北品川に入ると右に桜の名所御殿山が見え、目黒川に架けられた品川橋を渡ると南品川宿に入る。右に品川寺、紅葉の名所の海晏寺など寺社が続き、大井村のはずれの立会川に架かる浜川橋（涙橋）を渡ると、その先に鈴ヶ森刑場がある。さらに、大森村、蒲田村を抜けると多摩川に至り、六郷の渡しを越えると川崎宿となる。

本稿では、江戸時代から明治にかけての日本橋から品川宿までの様子を資料によって辿り、それが、本学蔵の浮世絵では、どのように絵画化されているかを探る。

扱う資料は、ローレンス・オリファントの『エルギン伯使節団の物語』、および、ラザフォード・オールコックの『大君の都』の記述を中心とする。幕末に来朝したふたりのイギリス人は、品川宿境界の様子をどのように描いているのか。日本側の資料とも比較して、ヨーロッパ人の見た東海道という視点から考察を行う。

I 『エルギン伯使節団の物語』と『大君の都』

アーネスト・サトウ（Sir Ernest Mason Satow, 1843-1929）は、幕末維新の激動期にイギリス人として江戸幕府や薩長の要人と交わり、後年、その記録を詳細な日記をもとに『一外交官の見た明治維新』（*A Diplomat in Japan*, London: Seeley, Service & Co.; Philadelphia: J. B. Lippincott Company, 1921）として出版した¹⁾。サトウは、この著書の冒頭で、両親の望むケンブリッジのトリニティ・カレッジへ進学することなく、イギリス外務省の日本語通訳生の応募試験を受験したきっかけを次のように述べている。

ほんの思いがけないことから、私は日本に心をひかれはじめたのである。私が十八歳のとき、兄がミューディー図書館からローレンス・オリファントの書いた『エルギン卿のシナ、日本への使節記』というおもしろい本を借りてきた。やがて私のところへも回覧されたが、絵草紙ふうのこの本が私の空想をかりたてたのである。

その国では、空がいつも青く、太陽が絶え間なくかがやいている。岩石の築山のある小さな庭に面し、障子をひらけばすぐに地面へおりられる座敷に寝そべりながら、バラ色の唇と黒い瞳の、しとやかな乙女たちにかしずかれることだけが男の勤めであると言ったような——つまり、この世ながらのお伽の国。

My thoughts were first drawn to Japan by a mere accident. In my eighteenth year an elder brother brought home from Mudie's Library the interesting account of Lord Elgin's Mission to China and Japan by Lawrence Oliphant, and the book having fallen to me in turn, inflamed my imagination with pictures verbal and coloured of a country where the sky was always blue, where the sun shone perpetually, and where the whole duty of man seemed to consist in lying on a matted floor with the windows open to the ground towards a miniature rockwork garden, in the company of rosy-lipped black-eyed and attentive damsels —— in short, a realised fairyland.

サトウにお伽の国日本への空想をかりたて、その生涯に決定的な影響を与えた本の正式名は『1857, '58, '59年におけるシナ及び日本へのエルギン伯使節団の物語』(*Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and Japan in the years 1857, '58, '59*. William Blackwood, Edinburgh & London, MDCCCLIX, 2 vols, 1859)²⁾。エルギン (James Bruce, 8th Earl of Elgin and 12th Earl of Kincardine, 1811-63) はイギリスの外交官で、1857年、アロー号事件処理のために中国に特派され、翌1858年、天津条約を締結した後、江戸に来航して、同年8月26日(陰暦安政5年7月18日)、日英通商条約を締結した。著者のローレンス・オリファント (Lawrence Oliphant, 1829-88) は、このおりエルギンの私設秘書として随行し、使節一行の中国・日本における行動・交渉過程・見聞などを記録し帰国後すぐに本書を出版した。

オリファントが、江戸に滞在したのは、1858年8月12日から8月26日の約二週間。この短期間に日本に魅了されたオリファントは、日本人が芸術をとりわけて愛する国民であることを次のように述べている。

彼らは、肉体的には頑丈だが、その心情は上品で芸術を愛する人々である。彼らは怠惰を好まず、洗煉され、その趣味に合った仕事を愛している。商業は下劣な仕事だと考えられる一方、文学と美術、及び科学的な常識が高く評価されている。

It would seem that, while physically robust, their minds are of a cultivated and dilettante order. They love not idleness, but occupations which are refined and congenial to their tastes. Commerce is considered by them a degrading pursuit; while literature and the fine arts, and scientific acquirements, are held in high estimation.

『エルギン伯使節団の物語』が刊行された翌年の1860年(万延元年)の暮れ、ローレンスは、外務大臣ジョン・ラッセル卿 (John Russell, 1th Earl Russell) の推薦によって日本公使館の第一書記官に任命される。1861年(文久元年)6月末、再来日を果たしたローレンスは、

高輪東禅寺に設けられていた仮設英国公使館に到着する。時の在日総領事は、オールコックであり、ローレンスと入れ替わって帰国することになっていた。しかし、数日後の7月5日（陰暦5月28日）の夜、水戸藩士が東禅寺に乱入し（東禅寺事件）、ローレンスは、左手首に骨まで達するほどの切り傷を受ける。オールコックは、ローレンスの休養のために即刻帰国させることを決めた。この時のローレンスの日本滞在は、わずか十日ほどであった。

ラザフォード・オールコック（Sir Rutherford Alcock, 1809-1897）、1859年2月、初代駐日総領事兼外交代表に任命され、同年7月、高輪の東漸時に仮公使館を設置、同年11月には特派全権公使となる³⁾。裁判のために一時的に赴いた香港から長崎に到着した1861年6月1日、長崎から陸路で江戸へ向かい、およそ一ヶ月後の7月4日に公使館に到着。その直後に公使館を襲撃される。1862年3月23日、横浜より賜暇帰国の途につき、帰国後、『大君の都』（*The Capital of The Tycoon: a Narrative of a Three Years' Residence in Japan*, 2 vols., London: Longman, Green, Longman, Roberts, & Green, 1863）を出版する⁴⁾。1864年3月2日、夫人同伴で横浜に帰着し、同年12月24日、召還命令により公使の任を解かれて帰国した。なお、アーネスト・サトウが、横浜に着いたのは、オールコックが一時帰国中の、1862年9月8日で、その七日後に、薩摩藩主の父島津久光の行列に乱入した騎馬のイギリス人を、供回りの藩士が殺傷するという生麦事件が起きる。この時、ジョン・ニール（Edward St. John Neale）が代理公使を務めていた。

オールコックは、『大君の都』を著した目的を、オリファントおよびペリーの著作をあげて次のように述べている。

エルギン伯の使節団のオリファント氏がのべているような愉快で楽しい記録や、それよりさきのペリー提督の遠征記にくらべて、わたしの書いた記録には、他のものにはないようなある種の興味がある、とわたしは考える。オリファント氏の記録とペリー提督の記録のいずれもは、重要な事実を記述している。

（中略）

最初の外国側当事者とその後任者たちとが、まったく相異なる立場に立たされたがゆえに、それぞれの見地からまったくちがった光を投げかけて日本を観察したということは、至極当然であった。最初の特派使節一行の記録を補足し、正しく解釈するためには、恒久的に駐在することになった最初の公使一行の記録が必要であった。これを、わたしは、本書において、忠実かつ卒直に示してみようとしたわけである。フランス文学には「歴史としての回顧録」という分野がある。これは、歴史のもつ重々しさと権威を現わそうとしたものではないが、にもかかわらず、もっとも貴重な材料を歴史に提供している。わたしとしては、日本におけるわたしの三年間の経験の記録を、この範疇にいれたいと思う。

The narrative I have given would have a certain interest, I conceive, if all other were wanting, as a contrast to the pleasant and amusing account furnished by Mr. Oliphant of Lord Elgin's mission, and to that previously supplied by Commodore Perry's expedition. Both sides of the medal give important revelations.

.....

No wonder two authorities so differently placed should see Japan from different points of view and in a wholly different light! The history of the first permanent Legations was needful to complete and give the true interpretation to that of the first special Embassies. And this I have endeavored to give, faithfully and candidly, in the following chapters. The French have a whole class of literature entitled 'Mémoires pour servir à l'histoire' which, without aiming at the gravity and authority of history, furnishes nevertheless the most valuable materials for it. In this category I would place my narrative of a three years' experience in Japan.

オールコックには、全権公使という身分で、日本に三年間滞在した外国人という自負があった。彼は、外交官として、自らの目で観察し、調査することで、任国の様々な側面を理解しようとした。また、外国語の習得に熱心であったオールコックは、着任後、『初歩日本語文法』(*Elements of Japanese Grammar for the Use of Beginners*, Shanghai, 1861)、『日常日本語会話』(*Familiar Japanese Dialogues in Katagana and Roman Characters, with French and English Translation*, London, 1863)といった日本語の文法書や会話の本を出版した。さらに、日本在任中に日本美術に興味を持ち、後年、『日本の美術工芸』(*Art and Art Industries in Japan*, London, 1878)を出版している⁵⁾。

以下、オリファントとオールコックの記述の差異にも留意して、ふたりが記した東海道の品川界隈の様子を探っていく。

Ⅱ 品川沖

1858年8月12日朝、下田港を出航したエルギン卿一行は、約五時間後に浦賀水道に入り、正午頃神奈川沖を通過、川崎沖を経て、午後二時頃に品川の海岸から3マイル(約4.8km)、江戸から5マイル(約8km)の地点に投錨した。そして、翌朝は、海岸から1マイル半(約2.4km)のところに船を進める。

緑深い江戸の町

現在の碇泊地点から見渡すと、その沖に今われわれがいる品川の郊外から、はるか彼方に辛うじて見える長い橋〔永代橋〕に到るまでの、湾の沿岸に立ち並んでいる町の家並を見渡すことができた。この眺望はわれわれの所から町の中央部に到る中ほどに、湾の浅瀬から盛り上がっている五つの島の要塞〔品川台場〕によって遮られていた。美しい森に覆われ、頂上に寺院のある丘陵〔池上本門寺か〕が品川と町の西部との背景になっていた。また中央部の樹々の繁った高所は、ところどころに光った白壁が顔をのぞかせ、塔の屋根がくっきりと浮かんで、大君の城、すなわち居所であることを示していた。はるか西の方には、雄大な富士山の円錐形の山頂がひとときわ高くそびえていた。もっとも雲に隠れることが多かった⁶⁾。

From our present anchorage we could follow the houses of the city lining the shores of the bay from the suburb of Sinagawa, off which we were lying, to a long bridge just visible in the extreme distance. This view was intercepted by five island forts, which

rose from the shallow waters of the bay about half way between us and the centre of the city. Low hills prettily wooded, and crowned with temples, formed a background to Sinagawa and the western portion of the city, while a wooded eminence in the centre, gleaming here and there with a patch of white wall, and distinguished by the roofs of a pagoda, marked the citadel, or residence of the Tycoon. Towering over all in the western distance, but too often concealed by clouds, the majestic Fusi-yama reared its conical summit.

エルギン卿が来日した翌年の1859年6月26日、オールコックを乗せたイギリス軍艦サンブソン号は、江戸が真正面み見える位置に錨を下ろした。それは、かつてエルギン卿を乗せたフェリアス号が投錨したのとはほぼ同じ場所であった。

品川台場

広大な首都も、海岸から二マイルほど沖合いに建設された一連の砲台の外側にある投錨地からは、あまりよく見えなかった。それは、低い家々と樹木にふちどられていて、背後には見るからに木がおおいげっている小高いところがあるようだ。はっきりと見えるのは、ところどころにある寺か大名の庭園の白壁ぐらいなものである。サンブソン号は、海岸から四マイルは十分にはなれて停泊しているのだが、その水深は三尋〔約五・五メートル〕しかない。湾は、岸にそって遠浅だ。それゆえに、干潮のときには、ボートですら岸から一マイルのところまでしかゆけない。このめぐまれた自然の防備に加えるに、深水路と都市とのあいだに五つ以上の砲台が介在しており、海岸にある数個の砲台と相まって、あらゆる方向に大砲を向けている。わたしが観察したかぎりでは、砲台の数とその威力は、諸外国代表の到着に呼応して、増大の一途をたどりつつある。とにかく、湾上からながめたかぎりでは、江戸には壮大なものはなにも見当たらない。すでにのべたように、その理由の一半は、ほとんどが一階建てという低い家々をおおいかくしてしまっているいたるところにおおいげっている大量の樹木にあり、他の一半は、高台が介在していて都市の大部分をとおくからは見えないようにしている地形にある。

Little of the capital, vast as it is, can be seen from the anchorage, which is outside a line of batteries built some two miles from the shore. Fringed with low houses and trees, some higher ground appears behind, apparently covered with wood. Only here and there a temple, or the white walls of a Daimio's park, can be distinguished. The 'Sampson' lay full four miles from the shore, and even then only in three fathoms of water. The bay shoals all along the banks on which the city stands, so that, at low water, even a ship's boat can not approach within a mile! Notwithstanding this best of natural defenses, no less than live batteries, faced with guns on every side, interpose between the deeper channel and the city, besides several on shore; and the number and strength of these, I may observe, went on increasing continuously from the arrival of the Foreign Representatives. There is thus nothing imposing in the aspect of Yeddo

from the bay. This is partly due, as I have indicated, to the great amount of timber every where, which conceals the low houses, in many cases only single-storied, and partly to the formation of the ground, high land interposing, and concealing by far the larger part of the city.

品川沖に碇泊した船上からは、近くは御殿山とその周辺に広がる寺院、また、高輪の東海道に沿って並ぶ大名屋敷や寺院が、そして、北方には、遠く隅田川河口や江戸城が見えた。壮大な建築物は見当たらず、低層住宅は樹木に覆い隠され、江戸の町の大部分は、丘陵の向こうにあって見るができない。さらに、深水路には、五つ以上の砲台があって、これが視界を遮っていた。

オリファントやオールコックの注意を引いた品川台場は、幕府が、江戸の防衛のために建設した洋式の海上砲台である。嘉永6年（1853）6月、ペリー艦隊が浦賀に来航して幕府に開国要求を迫った。脅威を感じた幕府は、同年8月6日、海防の建議書を提出した伊豆蓑山代官の江川太郎左衛門に砲台建設を命じ、同月26日より台場の築造が始まる。品川沖に11基の台場建設が計画されたが、第八台場以降は未着手に終わる。しかし、品川の御殿山のふもとに御殿山下台場が建設され、安政元年（1854）11月までに、合計八つの台場が建設された⁷⁾。

1858年8月17日、エルギン卿一行は、多くの日本人が沿岸で見物するなか、芝新銭座江川太郎左衛門調練場より上陸。東海道を高輪町、芝田町、本芝と進み、芝橋を渡って芝金杉通に至り、芝西応寺町の西応寺（現港区芝二丁目）に入った。

一方、オールコック一行は、1859年7月3日、浜御殿（現在の浜離宮恩賜庭園）近くの運河から上陸。愛宕権現下にある真福寺（現港区愛宕一丁目）に入るが、これが手狭であったため、即座に東海道を通過して、高輪東禅寺に赴く。そして、7月6日、東禅寺に英国旗を掲揚し、これを仮公使館とした。

Ⅲ 川崎大師詣

1858年8月24日、オリファントは、宿泊地から東海道に出て、高輪、品川、大井、大森、蒲田を抜け、多摩川を渡って川崎の大師河原に向かった。目指したのは、真言宗智山派の大本山の平間寺、通称川崎大師である。

鈴ヶ森

八月二十四日、われわれは、江戸から神奈川の方に約十マイル離れたところにある有名なダイ・チイナラ Dai Chieenara〔大師河原か〕の寺院へ、遠乗りに出かけた。道は、今度は以前に出かけたときと反対の方角だった。五、六マイルの間、湾に沿った長い、西の郊外を抜け、まず品川 Shinagawa と呼ばれる悪名高い地域〔品川の遊郭か〕を通った。そこはちょうど都合よく、帰りのときに見物した。それから半リーグでオモガワ Omogawa〔浜川か〕を通り、公開の処刑の場所として名高い地点〔鈴ヶ森の刑場〕を過ぎた。それはちょうど町はずれの草の生い茂っている修羅場の中であって、八フィートから十フィートの高さの一本石が、犠牲者の最後の席である石の腰掛にとりかこまれて立っていた。一般に死に値する罪を犯したものは、公の刑吏の機先を制して、腹切

hara-kiriによってその不名誉を免かれたのである。ふつうの処刑の手段は斬首である。しかしティチングは、場合によっては苛責ができるかぎり延ばされ、刑吏の手練が、生命をとらずに負わせることのできる傷の数によって試されるといっている〔死罪の者は試斬に供せられた〕。

この不愉快な場所から少し先へ進むと、気持のよい稲田と広い耕地に出る。境界には樹々が並び、ときどき集って木立になっている。土地はまったく平坦で、道路は広く、よく、両側が並木になっている。旅人はきわめて多く、一般に徒歩だが、ときには中流階級に特有の駕籠 basket-chairに乗っているものもある。町を通り過ぎて、道路沿いに家がたくさん点在している。

On the 24th of August we started on another riding expedition to the celebrated temple of Dai Cheenara, situated about ten miles from Yedo, toward Kanagawa. Our road, therefore, led in the opposite direction from that which we had followed upon the former occasion, and took us through the long western suburb that skirts the bay for a distance of five or six miles, first through the notorious quarter called Sinagawa which we saw to greater advantage on our return journey, then for half a league through Omogawa, and past a spot which was celebrated as the place for public executions ; it was just on the outskirts of the town, in an aceldama where the grass was long and rank, and a monolith, eight or ten feet high, was surrounded by a stone bench, the victim's last seat. Generally criminals who have committed crimes worthy of death forestall the public executioner, and save themselves the disgrace by hara-kiri. The ordinary mode of execution is decapitation. Titsingh, however, says that in some cases the torture is prolonged as much as possible, and the skill of the executioner is tested by the number of wounds he can inflict without causing death.

A little beyond this disagreeable locality we come out upon pleasant rice-fields and wide areas of cultivation, divided by rows of trees, which are occasionally grouped in clumps. The country is perfectly level, the road broad and good, and lined with trees ; wayfarers are abundant, generally on foot, but sometimes in the basket-chairs peculiar to the middle classes. Even after the town has ceased houses are thickly dotted along the road.

茶屋

われわれは半分以上の道程を踏破したところで、当然のことながら、茶屋に足を止めた。陽光は焼きつくばかりだった。八月の最中に傘もささず、漆塗りの鞍で日向を騎行したので、茶屋のありがたさが身にしみた。一番涼しい片隅をえらんで、柔かい畳のうえにのびのびと横になって、茶を飲み、果物を食べ、ごく小さい煙管で煙草を喫い、美しい娘たちにあおがれているうちにうとうとしてしまった。やがて冷酷なタイノスケ Tainoske が、もう時間が来た、もし寺を見物したいならば、思いきってもう一度日本の陽光を浴びなければならない、といった。そこでわれわれはまた道を進み、六郷川 Logos river に着いた。

Of course, after we had completed a little more than half our journey, we stopped at a tea-house. The day was scorchingly hot. Riding in the sun on a lacker-saddle, without an umbrella, in the middle of August, is a process which makes one appreciate the merits of a tea-house. We find the coolest corner, stretch ourselves full-length on the soft mats, drink tea, eat fruit, smoke infinitesimal pipes, and get ourselves fanned into a comatose state by fair damsels, until the inexorable Tainoske tells us that the time is up, and that, if we are to see the temple, we must once more brave the rays of the Japanese sun. So we are again *en route*, and jog on till we reach the Logos River.

東海道に出た騎馬のオリファント一行は、日本橋とは反対方向に進み、品川宿を通り越し、浜川橋を渡って鈴ヶ森刑場に至る。この大井村の先にあった刑場は、慶安4年（1651）に、由井正雪の乱に関係した丸橋忠弥らを処罰したときに設けられたとされ、閉鎖は、明治4年（1871）。「南無妙法蓮華經」と記した髭題目の石碑が、火炙り用の鉄柱や磔用の木柱とともに聳えていた。隣村の不入斗村の鈴ヶ森八幡宮に近接していたので、鈴ヶ森の御仕置場と呼ばれる。江戸の北の入口（日光街道）に設置されていた小塚原刑場、西の入口（甲州街道）沿いに設置されていた八王子の大和田刑場（または中仙道の入口の板橋刑場とする説もある）とともに、江戸三大刑場といわれた⁸⁾。

この不吉な場所を見て後、のどかな田園地帯を通り抜ける。東海道は平坦で広く、両側には並木が植わっている。炎暑にもかかわらず行き交う人は多く、料金のかかる駕籠に乗って行く者もいる。ふたたび沿道に人家の続く大森村に入った一行は、おそらくこの地の茶屋で休憩を取った。大森には、『東海道中膝栗毛』に、「大森といえるは麦藁ざいくの名物にて、家ごとにあきなう」と記されるように、麦藁細工の店があることで有名であったが⁹⁾、海道茶漬の有名店もあり、さらに暑気あたりに効くという和中散を商う店が三軒あった。

一時の平安をオランダ語通事の志筑禎之助に破られた一行は、さらに馬を進め、六郷の渡しにたどり着く。

IV 品川の町並み

イギリス人にとっても快適で理想的な立地条件の東禅寺にあったオールコックは¹⁰⁾、赴任後、この高輪の寺院を起点として、首都とその周辺の探索に出かける。それは、日本人がいかに「生活し、行動し、存在している」かをヨーロッパ人に知ってもらうためであった。

その記述は、先ず東海道の日本橋方面へ向けての品川界隈の様子から始まる。東禅寺の門前の松と杉の並木道を抜けると、そこは東海道であった。

茶屋

われわれは、湾のほとりにさしかかった。道は湾に面した絶壁の下を湾にそって走っている。ここは品川地区が、あたかもロンドン市内にケンジントン地区〔ロンドンの西方にある自治市邑〕がはいりこんでいるように、市内にくだりこんでいる場所である。舗装の悪い道（碎石舗装は世界でいちばんよい舗装だが、それにしてもこの国の五〇マイルにおよぶ舗道は最悪の舗道だといえる）をすすむと、ときどき家が建ち並んでいるので、右手にひろがっている湾が見えなくなる。その家々の多くは茶屋であるが、一部の

ものは粗末な小屋にすぎない。それらは、とおくからやってくる旅行者が腰をおろして休むところである。かれらはお茶を飲みながら、片側のさざ波をたてている海やはるかなる海岸の美しい景色をながめたり、大きな公道ぞいの首都の風物をながめたりして、目を楽しませる。

Our way lies first along the edge of the bay, under the bluff which skirts it, where the suburb of Sinagawa merges into the city, much as Kensington straggles into London. Along the ill-paved road (the worst bit for fifty miles in a country remarkable for the finest macadamized roads in the world) we pick our way. The bay, stretching to the right, is occasionally shut out by rows of houses, many of which are tea-houses, and some only mere harbours for travelers coming from afar to sit and rest in, while they sip their tea and enjoy the fair prospect of the rippling waters and distant shores on the one side, or the ways and manners of the Capital if they turn to the great high road.

大名行列

ここでは、この道が事実上の大通りであるわけだ。われわれはたえまなくつづく徒歩者や乗物ないし駕籠の流れとか、ときどき変化をそえる馬にのった役人の一団とか、他国ではずっと昔にしか見られなかったような、槍・戟・旗じるし・槍旗などをたずさえた騎乗者と歩行者からなる大名の行列とかを邪魔しないように、ゆっくりすすんでいった。

This road forms, in fact, the main street here. So, as we pace gently along, not to incommode the never-failing stream of pedestrians, — of 'Norimons', and 'Kangos', — varied now and then by a group of Yakonins on horseback, or some Da-imio's cortege of mixed horse and foot, with spear and halberd, crest and pennon, as in olden days in other lands.

商店街

我々には店のなかをのぞいて見るだけの余裕があった。店は表があげっぱなしになっていて、奥の小さな部屋まで丸見えである。店のなかにはこの小さな部屋がひとつしかないのが普通であって、そこが生活を営む場所となっている。いろいろな種類の店がある。だが、この地区にはひじょうに規模の大きい店とか重要な店はない。多くの店は、一般的な生活必需品を売る店である。本屋・青銅や銅器具の店・質屋・古い鉄器類の店などがある。また、あちこちには浴場・銅細工や籠細工の製造所・甲冑や刀剣類の製造所があり、既成品の衣服を売る店や版画屋なども見うけられる。

We have time to peer into the shops, open in front, and through the shops to the small back room, which generally forms the whole interior, and the region of domestic duties. The shops are of all kinds, but none in this quarter of the town are of very great size

or importance. The common necessities of life are on sale in many. There are booksellers', shops of bronze and copper ware, pawnbrokers', and old iron shops. Bath-houses, coopers and basket-makers, armorers and sword-makers, with here and there a stall of ready-made clothes, or a print-shop, fill up the list.

木戸

だいたい一〇〇歩ごとにひとつの割りで、見張り用の関門がもうけられている。この関門は、夜分に盗難があったり、日中でもなにか騒動が起きたさいには、閉鎖される。

Every hundred steps, more or less, we pass a ward-gate, which at night they can close if an alarm of thieves is given, or by day if any disturbance should arise.

『東海道名所図会』（秋里籬島、寛政9年・1797・刊）の「高輪茶店」の絵は、東海道と高輪の町を品川の海から眺めた構図を取る。海には帆掛け船が停泊し、東海道は、まさに海べりを通る。この海道沿いには、深い森林を背景にして酒亭や茶店が立ち並び、海側には葭簀を張っただけの店が続く。この絵に描かれた様子は、『守貞謾稿』（嘉永6年・1853・成）巻之五には、次のようにあって、その茶屋の多くは、幕末には品川宿の娼家の引手茶屋であった。

江戸ノ東海道品川駅ヲ、街道ノ第一トス。品川駅ノ北ヲ高輪ト云。八町アリ。北一片ハ連屋、過半品川娼家ノ引手茶屋、南ハ海岸ニテ、葭簀張ノ水茶屋連リテ、虚地無之、高輪八丁如此也。

「高輪茶店」の絵では、これらの店の間を大名行列が通り抜けている。また、泉岳寺境内近くから右に進んだ道の両側には石垣を築いた大木戸があった。それを越えた先には高札があって、これより先が江戸市中であった。

「五街道取締書物類寄拾式之帳 通行方之部一、順路不順路之類」には、「文政四巳年取締筋調ニ付、糺置候五街道通行之大名訳書」として、五街道を通行する大名の一覧が載る¹¹⁾。これによれば、文政4年（1821）当時、大名総数262名のうち、東海道を通るのは153名を数える。そして、たとえば天保13年（1842）の保土ヶ谷宿の人馬継立数を見ると、薩摩藩の島津氏の場合、徒以上と足軽以下を合わせて総勢452名、これに352名の使用人足が従った。残された記録によれば、文政2年の年間を通じての品川宿での上下人馬の継立数は、人62,704名、馬22,399疋というものであった¹²⁾。東海道の元宿といわれた品川宿の人馬の往来、また大名行列の通過は、五街道の各宿のなかで最も頻繁であった。

大木戸を越えてしばらくすると、芝田町四丁目で、道が二股に分かれる。右が東海道で、金杉橋を渡ると浜松町に出る。神明町に入ると商店街が続き、一本路地を入った神明前には、『東海道名所図会』にその店先の様子が描かれる和泉屋と枳屋という江戸でも有名な書肆があった。店は通りに面して開け放たれており¹³⁾、店先には、書物とともに美人画・役者絵・相撲絵・風景画といった浮世絵が並ぶ。絵の詞書きには「種々の画多くありて海内これを賞して土産の第一とす」とあるが、幕末期以降、日本人のみならず外国人が、これらの店で、

浮世絵を始めとして絵入り本の類を購入することとなる。

V 品川遊郭

川崎大師に参詣したオリファント一行は、帰路、川崎の宿の茶屋、おそらく奈良茶飯で有名な河崎万年屋で夕食をとり、ふたたび六郷の渡しで多摩川を越え、遅い時刻に品川宿を通り過ぎた。

旅籠屋

ふたたび品川に入ったのは午後遅くなってからだった。街はとりわけ雑踏しているようだった。しかしこの郊外地のもっとも変った特色は、それを構成している家々と、それが当てられている目的である。というのは、少なくとも一マイルの間、われわれは実に大きな規模で作られている建物の並ぶ間を馬で通ったからである。階段のついている奥行の深い露台は、この国のもっとも変った特徴の一つである制度の不幸な犠牲者の群れで文字通りいっぱいになっているようだった。

It was late in the afternoon ere we re-entered Sinagawa, and the streets seemed more crowded than ever ; but the most singular feature in this suburb is the houses of which it is composed, and the purpose to which they are dedicated. For at least a mile we rode between establishments organized on a most extensive scale. Deep verandas, approached by flights of steps, seemed literally packed with the unfortunate victims of a system which is one of the most singular characteristics of the country.

飯盛女

われわれが馬で品川を通過したのは祭の日の一番にぎわっている時刻だったので、どの家にも素見客が群がっていた。両側に、ピンクと白に塗った彼女たちの顔が重なり合って並んでいた。その人数はわからなかったが、おそらく数百人というよりも数千人に及ぶだろう。その家々はこれまで江戸で見かけたどんな家よりも立派だった。もっとも王侯の邸宅は別である。大部分の家には、奥に、爽涼とした庭に噴水の出ている中庭を見ることができた。

As it was just at the gayest hour of the festive day that we rode through Sinagawa, every house contributed its swarms of gazers ; on each side their faces, painted in pink and white, rose in tiers above each other. I could not judge of the numbers, but they were to be estimated by thousands rather than hundreds. The houses were handsomer than any I had seen in Yedo, except the residences of the princes. We could generally see through them into court-yards, where fountains played in cool gardens.

オリファントが、品川を通過したおよそ二年後の1860年9月4日、オールコックは、一時的に日本を訪れていたインド海軍のロビンソン大尉や植物学者ヴィーチを伴ってかねてから念願であった富士登山に出発する。警護の役人や日本人の従者などを加えると総勢100名を

こえる人数での旅であった。一行は、東海道を小田原、箱根、三島と進み、吉原宿から富士山をめざし、9月11日に外国人として始めて富士山登頂を実現する。登山後は熱海で二週間にわたって静養し、9月末、小田原から東海道を通して、江戸高輪に向かった。

酔客

いまやわれわれは、品川〔東海道一次の宿駅〕に近づいた。ここは、すでに何回もふれたように江戸のすぐ手前にある大きな町だ。ここでは、夜になると道路全体が灯火で明るく照らし出されて、ここにある多数の茶屋や居酒屋に出入りする人びとがあちこちをひんぱんにとおる。徒歩ないし乗物にのった両刀階級の者たちが道をふさぎ、かれらに出くわした下層階級の人びとが不幸にも災難に会うことになる。なぜなら、八時すぎともなれば、酒に酔っ払って、正気を失い、思慮分別をなくしているからだ。このからいばり屋たちは、意識が明瞭なときにはただいばりちらすだけだが、酔っ払うとなにをするかわからない。かれらの手は鋭利な刃物の柄にかかっていることが多く、そうでないとしても不愉快なことにならずその近くに手をもっていつている。だが、まだ危険な時間になっていないから、われわれは多分無事にとおり抜けることができるであろう。

And now we approach Sinagawa, the great suburb immediately before Yeddo itself, already more than once referred to. Here, at night, the whole road is an illumination of lanterns, with frequenters of the numerous tea-houses and places of entertainment situated here passing to and fro. The two-sword-ed men, on foot and in norimons, block up the way, and woe betide any luckless man of the inferior class who comes acroftw their path; for ailer eight o'clock the saki is in, and the wit is out, and any discretion with it, which, in more lucid moments, the race of swashbucklers may boast. Their hand is often on the hilt of their sharp-edged sword, and always in unpleasant proximity. It is not yet the dangerous hour, so we shall probably pass unmolested.

旅籠屋は、食売女（飯盛女）の有無で、食売旅籠屋と平旅籠屋に区別される。弘化3年（1846）の「宿並地図」によれば、品川宿には、食売旅籠屋が95軒、平旅籠屋が16軒、木賃宿が1軒あった¹⁴⁾。明和元年（1764）8月7日、道中奉行より南北品川宿と歩行新宿の三宿で食売女を500人まで抱えることが許可される。しかし、天保15年（1844）正月に取締を受けた時は、1358人の食売女が捕縛されており、その翌年の弘化2年（1845）には、はやくもその数が668人に回復している¹⁵⁾。

また、高輪の車町から北町・仲町・南町にかけての一八町（約2km）の間には、百軒余りの茶屋があったが、これらはほとんどが、先に引用した『守貞謾稿』が記すように客を品川の食売旅籠屋に手引きする引手茶屋であり、なかには酒食を提供するだけでなく女芸者を置いている店もあった。

品川には、御殿山の桜、海晏寺の紅葉、袖が浦の潮干狩りといった行楽地があった。また、品川では、大山詣りや富士登山、鎌倉・江ノ島方面への寺社参詣、伊勢参りの帰路などに精進落としとしての遊興が行われた。さらに、吉原が北国・北州・北狄というのに対し、南国・南州・南蛮と対比される品川には、府内芝方面から一夜の興を求めてやってくるものがいた。

品川宿の客は、芝山内の僧侶が五分、薩摩屋敷が三分、町人が二分といわれた。食売旅籠屋では土蔵相模と呼ばれた歩行新宿の相模屋が有名であるが、幕末には北品川宿の岩槻屋佐吉が全盛を極めていた。薩摩屋敷は、芝三田に上屋敷が、高輪に下屋敷があった。幕末の動乱期、薩摩の武士は、毎夜、品川宿に現れて大酔し狼藉を働いた。西洋の教養を身につけたオリファントやオールコックにすれば、品川宿は、東海道のなかで最も忌み嫌うべき場所であった。しかし、品川で財をなした佐吉は、安政6年（1859）11月10日、横浜に宏大雄壮な岩亀楼を建設する。そして、この妓楼には、横浜開港に伴ってやってきた外国人たちが多数参楼していたのであった。

Ⅵ 浮世絵に描かれた風物

幕末の品川宿の様子を、西沢一鳳『皇都午睡』（嘉永3年・1850・成）は、次のように記している。

品川宿は東海道の咽首なれば、又陽気なる事此上なし。高縄より茶屋有て（案内茶屋也）品川宿の中央に小橋有り、それより上は女郎銭店、橋より下は大店也。女郎屋は何れも大きく、浜側の方は椽先より品川沖を見晴らし、はるか向ふに、上総・房州の遠山見えて、夜は白魚を取る篝火ちらつき、漁船に網有り、釣あり、夏は納涼によく、絶景也。（中略）女郎屋頗る多し。中にも土蔵相模・大湊屋など名高し。岡側の家は後に御殿山をひかえ、浜側は裏に海をひかえ、往来は奥州・出羽より江戸を過ぎて京・西国へ赴く旅人、下る人は九州・西国・中国・畿内の国々より行く旅人ども、参宮・金ぴら・大山詣り・富士詣、鎌倉・大磯の遊歴やら箱根の湯治、参勤交代の大小名、貴賤を論ぜず通行すれば、賑わしきこと此上なし。表の間は板敷にて玄関構へ、中店は勘定場にて泊り衆の大名・旗本衆の名札を張り、中庭・泉水、廊下を架し、琴・三味線の音など聞へ、道中女郎屋の冠たるべし。名物は鮮魚をおもとし、品川海苔・柳鯨白魚・貝のむき身の類。

江戸の入口高輪には東海道の左右に石垣を築いた大木戸があり、この先品川までは海沿いに道が続き、右側（北側）は茶屋などが立ち並び、左（南）は海岸で、葭簀張りの水茶屋が並ぶ。道に標示杭が立ち、小さな丘陵の八つ山が真右に見えると品川宿に入り、道は海ばたを離れて町並みに入る。歩行新宿、北品川、南品川と続く品川宿の町並みは南北に19町40間（約2,145^間）あり、高輪町境から大井町境まですべて家並みであった。食売旅籠屋、平旅籠屋、水茶屋、煮売渡世、餅菓子屋、蕎麦屋などが宿場風景をつくっていた。また、北品川と南品川を分かち目黒川の河口には漁師町があり、鮫洲、御林町とともに漁業が盛んであった。品川沖には、漁師の漁船が行き交うとともに江戸に物資を運んできた大型帆船が停泊していた。そして、六郷の渡し手前の大森村には、麦藁細工の土産物店の他に近江国梅木村に本舗を持つ和中散を商う店が三軒あった。和中散は、暑氣中り、暑氣払いの売薬で、江戸人によく知られていた。

街道上は、京登り、東下り、伊勢参宮をはじめとする参詣者で混雑し、くわえて江戸藩邸と自国を行き来する大名行列が頻繁に通過した。しかし、この参勤交代の制は、文久2年（1862）閏8月に、幕府が緩和令を出したことにより時の経過とともに有名無実化し、諸藩の

武士の行き来は大幅に減少する。これに変わって翌文久3年2月に、徳川家茂が229年ぶりに将軍として上洛する。この時、総勢3000人が、東海道を京都二条城まで武装行列した。また、元治元年（1864）7月の第一次長州征伐、さらに慶応元年（1865）5月の第二次長州征伐のおりには幕府閣僚やその鉄砲隊が東海道を行き来した。

1865年7月（慶応元年閏5月）、オールコックの後任公使となったパークス（Sir Harry Smith Parkes, 1828-1885）は、維新後、明治政府に、中央集権・国内市場の統一のためには鉄道建設が不可欠であることを勧告する。明治2年11月に鉄道建設の政府決定、翌明治3年3月にはイギリス人技師モレルが横浜に到着し、鉄道建設が着工される。明治5年5月にまず品川・横浜間が開通し、同年7月には新橋・品川間の線路敷設が完了する。このなかで高輪・品川間は難工事のひとつにかぞえられていた。それは、品川の八つ山には陸軍の事務所があり、浜御殿には海軍の事務所があって測量に立ち入ることができず、高輪・品川間は海の上に土手を築いて線路を施設したためであった¹⁶⁾。日本最初の機関車は、明治4年に英国5社から10両が輸入された。そのうち4両がシャープ・スチュワート社製の160型で性能が優秀でもっとも活躍した。

明治期の品川は、陸地では東海道と鉄道が並走し、品川沖には蒸気船が停泊して、近代的な風景をいち早く見ることができる場所のひとつであった。

【注】

- 1) 邦訳に『一外交官の見た明治維新』上下（坂田精一訳、岩波書店、昭和35年）がある（訳文引用は本書による）。また、英文の引用は、2007年Stone Bridge Press 発行 *A Diplomat in Japan: The Inner History of the Critical Years in the Evolution of Japan When the Ports Were Opened and the Monarchy Restored* の本文による。なお、サトウの記録した東海道については、「本学蔵東海道関係浮世絵（一）－教材としての浮世絵へのイントロダクション－」（『東京成徳短期大学紀要』平成21年3月）において考察した。
- 2) 本書二巻のうち、日本にかんする部分（第二巻第一章～第十二章）の邦訳に『エルギン卿遣日使節録』新異国叢書9（岡田章雄訳、雄松堂書店、昭和43年）がある（訳文引用は本書による）。また、英文の引用は、1970年 Praeger Publishers 発行の本文による。
- 3) オールコックの日本滞在三年間については、次の二書に考証がある。
 - ①増田毅『幕末期の英国人－R・オールコック覚書－』（有斐閣、昭和55年）。
 - ②佐野真由子『オールコックの江戸 初代英国公使が見た幕末日本』（中公新書、平成15年）。
- 4) 邦訳に『大君の都』上中下（山口光朔訳、岩波書店、昭和37年）がある（訳文引用は本書による）。また、英文の引用は、初版本による。
- 5) 邦訳に『日本の美術と工芸』（井谷善恵訳、小学館スクウェア、平成15年）がある。
- 6) [] 内の注は、翻訳者による。以下、同じ。
- 7) 品川台場については、『品川区史』通史編上巻（東京都品川区、昭和48年）参照。
八つの台場の着工と完成、その後の撤去などを示すと以下のようである。
 - ・第一御砲台場（10,276坪9合4勺）
嘉永6年8月着工、安政元年4月完工、昭和38年埋立地に埋没。
 - ・第二御砲台場（10,276坪9合4勺）
嘉永6年8月着工、安政元年4月完工、昭和36年撤去。
 - ・第三御砲台場（8,526坪余）
嘉永6年8月着工、安政元年4月完工、現存。

- ・ 第四御炮台場
安政元年11月着工、埋立終了後工事中止、昭和14年埋立地に埋没。
- ・ 第五御炮台場（5,773坪余）
安政元年1月着工、同年11月完工、昭和37年埋立地に埋没。
- ・ 第六御炮台場（5,432坪余）
安政元年1月着工、同年11月完工、現存。
- ・ 第七御炮台場
安政元年11月着工、埋立終了後造成中止、昭和40年撤去。
- ・ 御殿山下御炮台場（7,386坪余）
安政元年1月着工、同年11月完工、昭和32年撤去。

8) この刑場について『新編武蔵国風土記稿』（昌平坂学問所地理局編、文化7年・1810～文政11年・1828成稿）には、次のようにある。

浜川町より南の方にあり。慶安四年より此所にて一段二畝の地を刑罪場と定められたり。前面の海岸に老松一株あり。故に土人一本松獄門場と云。又鈴ヶ森獄門場ともいへど、鈴ヶ森の地は隣村不入斗村に属して当村に係らざれば、此唱へは里俗の訛りなり。

9) シーボルト（P. F. von Siebold, 1796-1866）の「江戸参府紀行」（“*Nippon*”1832-1851刊の第二部所収の「1826年における江戸幕府への旅行」にあたる）の5月18日（陰暦文政9年4月12日）の項には、次のようにある（呉秀三訳「異国叢書」1929年駿南社刊所収本による）。

我等は名に高き日本橋を通り、京橋を渡り芝口・金杉・海に直近き市部なる高輪・品川を過ぐ。大森にて薩摩老侯は我等を迎へたるが、八十二歳の老年ながら強健にして、活潑に、善く談話し、其子は養子にて、某執政の子なりと云ふ。老侯は少しく和蘭語をも話し、前々の蘭館長チッチンをよく知れりと語れり。尋ぎで鈴ヶ森の崎を過ぐ。公けの刑場あり。数日前に一人の放火者火焙に処せられたり。大森にて中津公と袂を分つ。侯はなほ訣別の会釈せんとて騎馬にて前を打たせたるなり。途中余は美事な藁細工（多くは玩具なり）を売る店を見る。轆轤細工・彫刻品もあり、棕櫚の葉茎の組織にて編みたる細工物もあり。何れもニュルンベルグの玩具のクリスマス店にさも似たり。貝殻其他の海産物をも買へとて呈供せらる。藁を編み又畳みにする細工は日本に於て大に行はれ、第一に人や動物の靴を藁にて作る。街道にては時々旅人が取失ひ又打棄てたる藁靴の堆きを、肥料とするため人の集むるを見る。東海道の大街道は我等の辿り行く、日本中の人通りの最多きものなり。此道は少しの山路を除いては町・村・茶屋の絶間なき排列をなし、村は通例二筋の家並より成り、そのため一村は他村に接する迄に長く延びたり。

10) オールコックは、仮公使館の様子を次のように記している。

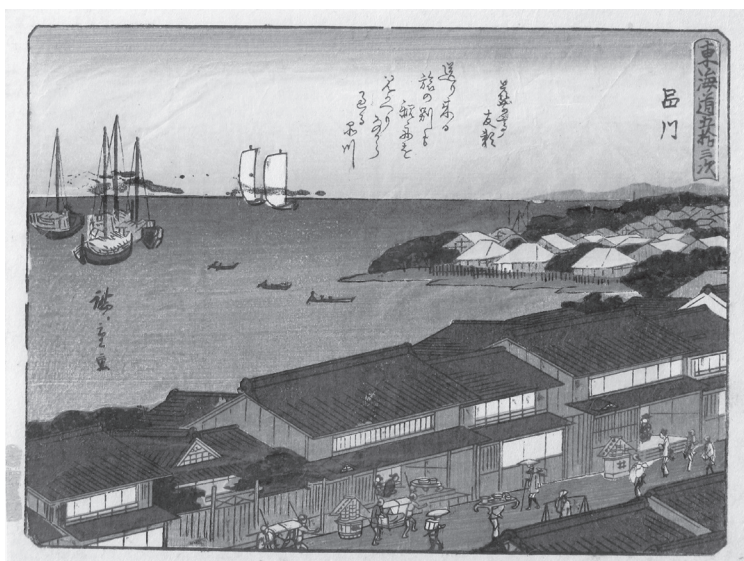
東禅寺は、江戸にある最大かつ最良の寺のひとつであって、仙台侯〔伊達家〕の特別の保護をうけている。この仙台侯は、有力な半独立の大名のひとりで、かれの支配下には多数の家臣がおり、広大な領土を有している。わたしは、歩きながら、江戸にはこれほどりっぱなところはないし、とくにイギリス代表に縁故のふかい場所である、ということを確認した。もともと、わたしは報告者の報告をそっくりそのまま信頼してはいなかったがゆえに、その驚きもまたひとしおであったわけだ。東海道（この島を貫通している大きな公道の名称で、ここでは湾にそってとおっている）を曲がって、入り口の門をはいると、スギとマツの木がはえている長い並木道がある。そこをとおって、堂々たる二階建ての第二の門をくぐり、ハス池のあるあき地をすぎると両側に植えこみがあり、最後に右手の入り口をはいってもうひとつの庭を通過すると、われわれの想像どおりに美しい日本の庭園や土地の一つの列に面して立派な建物がある。そのすぐ前には芝生があつて、池のかなたまでつづいており、池には丸木橋（この橋は、のちに、流血の場面が展開されるさいに、はなばなしい役割を演じることが運命づけられていた）がかかっていた。そして、この橋の向こうには、シュロの木やツツジや、短く刈りこまれて円い丘のようにになっている大きな灌木のしげみがあり、そのうしろには、り

っぱないろいろな日本の木や、カシやカエデなどの木からなる見事な林のついたてがある。また、池の向こう側にいたる丸木橋のつきあたりには、シュロの木やタケが点在しており、整枝されたウメの老木も見うけられた。右手の方は、傾斜の急な土手によって景色がさえぎられているが、その土手にも、種々雑多な花のさく灌木や笹がおいしげり、林のついたて以上にみごとである。ここをとおっている小道をたどってゆくとジグザグの階段があり、それをのぼりつめると、りっぱな並木道にでて、ひろい高台にたどりつく。そこは、よく展望がきいて、湾全体と下の市街の一部がまるで手にとるようにながめられる。遠景は、さながら群葉をえがいた一幅の絵のようであって、五〇フィートから一〇〇フィートぐらいの高さのマツの枝や幹が、青空高く塔のようにそびえたっている。かりに日本が流刑地だという見方をするとすれば、これほど美しい草庵をえらべたことはさいわいだといわざるをえない。正直なところ、わたしじしんは、この隠れ家があらゆる点であまりにも完璧であるがゆえに、なにか恐ろしいお返しがわたしの運命のうえにふりかかるのではないかということを恐れた。この予感、あまりにもみごとに的中し、しかも高価な代償を支払わされたようだ。

- 11) 『近世交通史料集1』(児玉幸多校訂、吉川弘文館、昭和42年)所収。
- 12) 大熊喜邦『東海道における宿駅と其の本陣の研究』(丸善株式会社、昭和17年)参照。
- 13) シーボルトは、「江戸参府紀行」(1826年4月10日)で、この辺りの様子を次のように記している。一階が開け放たれているというのはヨーロッパ人にとって、すこぶる印象的であった。

江戸湾の眺望及び碇を下す幾多の船舶は天空の雲に包まれて見るを得ず。街道は忽ち北、忽ち東北に向ひ高輪よりは西北を指し、次第に弘くなり行き、凡そ百七十八歩乃至百八十歩の間隔にて木の門あり。傍に柵籬と番舎とありて之を区劃す。各家屋の前には水桶あり。時として甚見事なる鑄鉄の容器あり。家屋は多分は新しく、又手入れよく、二階建にして黒ずみたる瓦にて覆はる。往来はすべて繁く活動し、家屋は富家の門を構へたる宮殿の他はすべて第一階を全く打開け、住民が今午食の準備に忙はしきを窺ふべく、欧羅巴の家屋が大抵閉鎖して中を見ること叶はぬとは逕庭あり。我等は此の如くして今迄の地方が次第に本来の都市に推し移りたるに気付き、身が既に江戸に入りて、大都市に到着したることは町通りの広く、往来ふ人の繁く、両側が富有なる商店に飾られたるところに深く入込みて初めて知るゝなり。

- 14) 『品川町史』上巻(品川町役場、昭和7年)参照。
- 15) 『品川町史』中巻(品川町役場、昭和7年)参照。
- 16) 『品川区史』通史編下巻(東京都品川区、昭和48年)参照。



①歌川広重〈初代〉

「東海道五拾三次・品川」

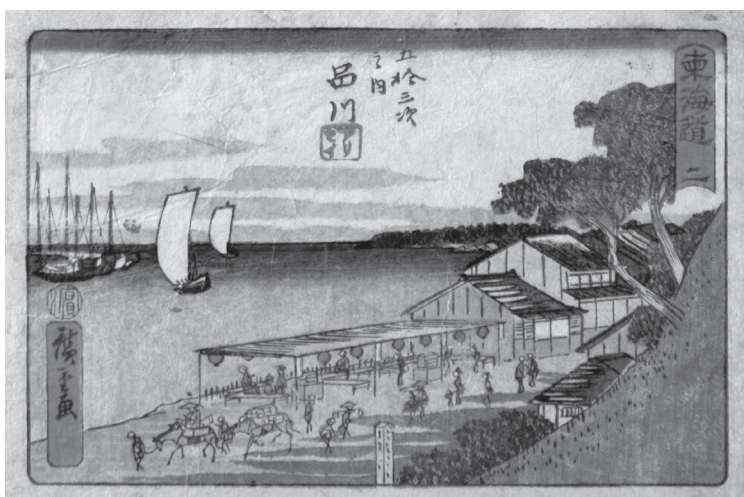
「花前亭友頼 送り来る旅の別も親船を見かえりなから過る品川」

判型 中判横

落款 「広重画」

版元 「佐野喜」(佐野屋喜兵衛)

改印 「極」(天保12年・1841・頃)



②歌川広重〈初代〉

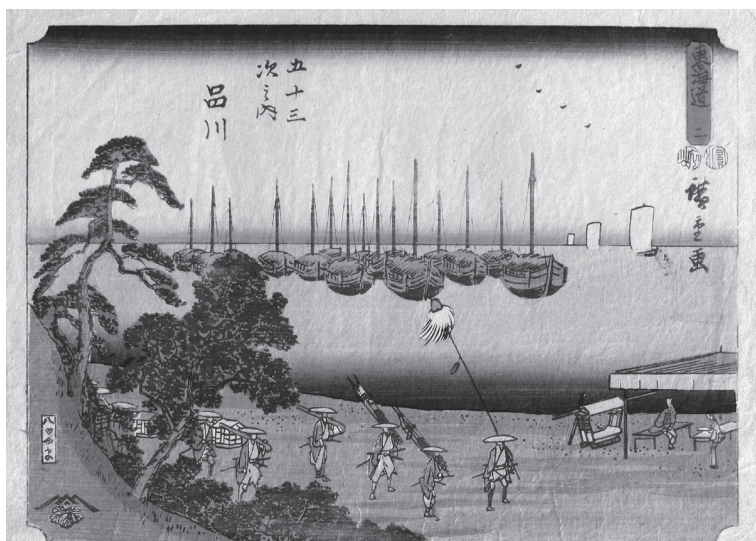
「東海道・二・五拾三次之内・品川」

判型 四つ切り横

落款 「広重画」

版元 「アリセイ」(有永堂、有田屋清右衛門)

改印 「濱」(天保14年～弘化4年・1843～1847)



③歌川広重〈初代〉

「東海道・二・五十三次之内・品川・ハッやま」

判型 中判横

落款 「広重画」

版元 「蔦屋」（紅英堂・蔦屋吉蔵）

改印 「濱」「衣笠」（弘化4年～嘉永5年・1847～1852）



④歌川広重〈二代〉

「東海道・名所大森」

判型 大判豎

落款 「広重画」

版元 「つきし大金」（大黒屋金之助・金次郎）

改印 「亥四改」（文久3年・1863・4月）



⑤歌川広重〈二代〉

「東海道名所之内・高輪大木戸」

判型 大判豎

落款 「広重画」

版元 「ト遠彦」(遠州屋彦兵衛)

改印 「亥四改」(文久3年・1863・4月)



⑥歌川広重〈二代〉

「東海道・品川」

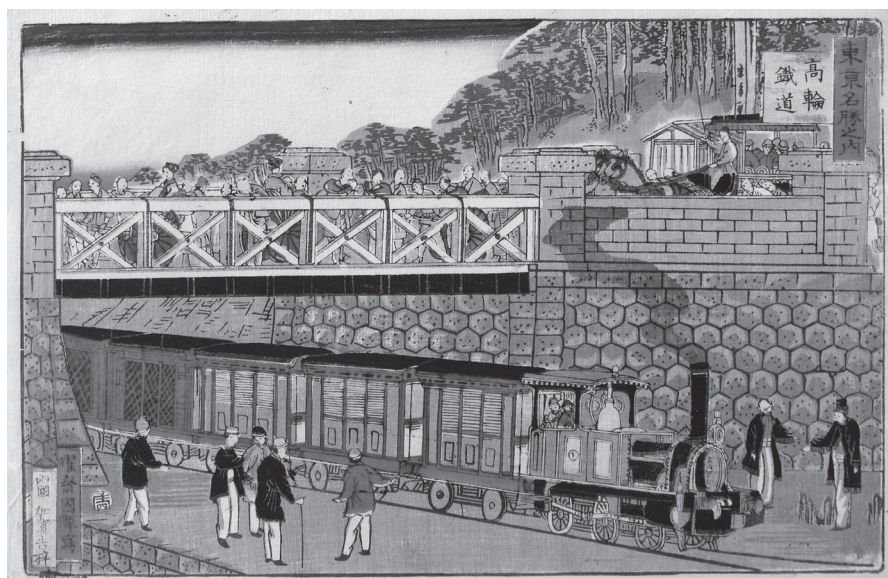
判型 中判豎

落款 「広重画」

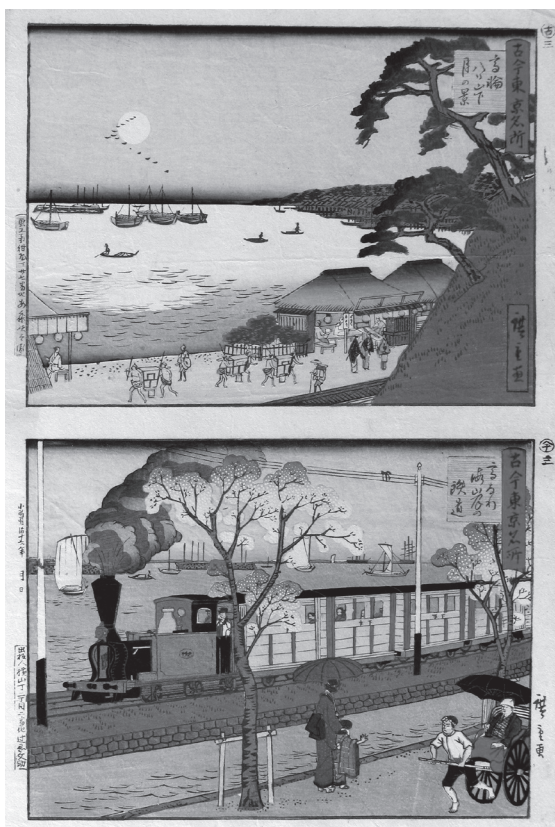
※文久3年(1863)カ



⑦立祥（二代広重）
「東海道五拾三驛・第貳・
品川新宿いり口」
判型 中判豎
落款 「立祥画」
※慶応元年（1865）



⑧歌川国輝〈二代〉
「東京名勝之内・高輪鐵道」
判型 大判横
落款 「曜斎国輝寫」
版元 「両国加賀吉梓」（青盛堂、加賀屋吉兵衛）
改印 「戊四」（明治7年・1874・4月）



⑨歌川広重〈三代〉

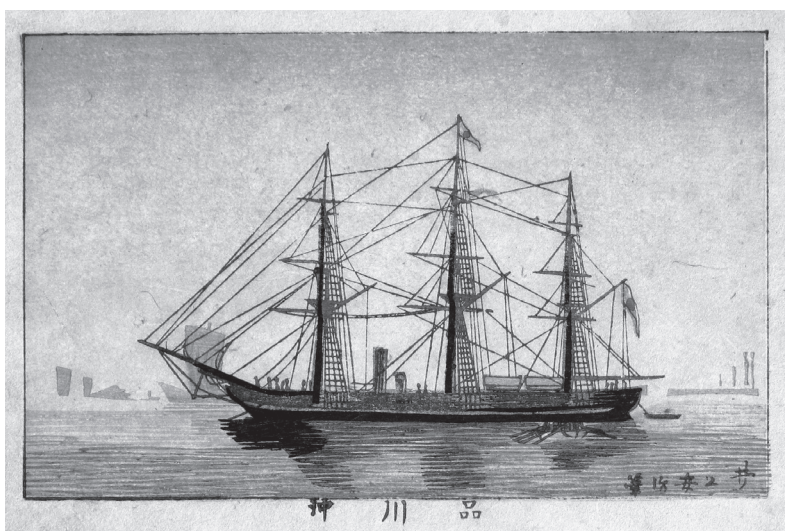
「古今東京名所・高輪ハッ山下月の景／
高なわ海岸の鉄道」

判型 大判縦

落款 「広重画」「画工南紺屋丁廿七番
地安藤徳兵衛」

版元 「出版人横山丁二丁目二番地辻
岡之助」

刊年 「御届明治十六年 月 日」
(1883)



⑩井上安治

「品川沖」

判型 四つ切り横

落款 「井上安治筆」

※「東京真画名所図解」（明治15～20年・1884～89）のうち